「外国語って何のために学ぶの？」にどう答えるか

第 157 回関西スペイン語教授法ワークショップ（TADESKA）例会

日時：2022 年 11 月 12 日（土） 15:00 - 17:00

場所：Zoom を利用したオンライン開催

担当：川口正通

¿Cómo explicar la razón de aprender una lengua extranjera?

CLVII Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai (TADESKA)

Fecha y hora: Sábado, 12 de noviembre de 2022, de 15:00 a 17:00

Lugar: En línea (Zoom)

Ponente: Masamichi Kawaguchi

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2022 年度 TADESKA の統一テーマである「新しい時代において、教育機関で外国語を学ぶ意義とは？」に合わせ、「「『外国語って何のために学ぶの？』にどう答えるか」」というタイトルでワークショップを実施した。まず担当者が話題提供として、自身が考える外国語学習の意義に関するプレゼンテーションをした後、参加者がいくつかのグループに分かれ、プレゼンテーションの内容を元にグループディスカッションをおこなった。担当者のプレゼンテーションの概要は以下の通りである。なお、これは担当者が過去に複数の高等学校への出張授業や受験生向けの大学進学イベント等でおこなったプレゼンテーションに加筆・修正を施したものであり、語学教師にとってはそれほど真新しい話ではない可能性があることをあらかじめお断りしておきたい。

<u>外国語学習の 2 つの視点</u>

・実用的視点

外国語学習において多くの学習者が思い浮かべるのが実用的視点である。一言で言えば、「外国語話者とコミュニケーションがとれるようになる」というものである。実際に、Lago ほか(2012) が日本の大学でスペイン語を学ぶ学生に対しておこなったアンケート調査でも、そのような結果が示されている。たしかに、外国語、とりわけ英語、中国語、スペイン語といった話者数の多い言語でコミュニケーションがとれるようになると、得られる情報量が桁違いとなり、またこちらの考えることをより多くの人に聞いて（読んで）もらえるようになる。ただしこの点については、最近は優れた翻訳アプリが複数登場しており、単にコミュニケーションをとるだけであれば外国語学習は不要との結論に到達する可能性がある。そこで出てくるのが、以下に挙げる「実用以外の視点」である。

・実用以外の視点

上記の通り、実用的視点は「外国語は外国語話者とコミュニケーションとるために学ぶもの」という考え方である。したがって、翻訳アプリを使ってコミュニケーションがとれるのであれば外国語学習は不要ではないかという結論に至る。しかしここで指摘しておきたいことは、（一般に広く信じられていると思われることとは異なり）基本的に、翻訳をするとなんらかのズレが出るということである。これは、そもそも訳語として適切なものが存在しない、訳者の解釈が入っているなどの理由が考えられ、元の言語で表現されていることが翻訳では表現されていなかったり、あるいはその逆になったりといったことが起こりうる。そして大切なことは、これは翻訳アプリだけでなく、通常の翻訳者による翻訳においても同様に起こりうるということである。この観点から言うと、外国語は外国語のまま理解するのが理想的ということになる。

上記のような「ズレ」が起こる原因の１つは、言語によって「世界の切り分け方」「ものの見方」が異なるからである。したがって、外国語を学ぶことで、その言語を使っている人たちの「世界の切り分け方」「ものの見方」を身をもって体験できるようになり、ひいては異なる文化背景を持つ人たちをよりよく理解でき、また自身の文化を外側から見ることができるようになる。

「英語だけできればよいのでは？」について

ネイティブ・ノンネイティブを合わせて、世界には英語話者が極めて多いため、英語でコミュニケーションをとればよいのではないかという意見もあるかもしれない。これは上記の「実用的観点」に近い考え方であると思われるが、「実用以外の観点」から考えれば、英語でコミュニケーションをするということは英語のものの見方で（場合によっては無理に）表現・理解するということである。それが必ずしも悪いこととは限らないが、場面によっては相手の言語を使うこと自体が意義を持つこともある。

「外国語」？

ここまで「外国語」という呼び名を使ってきたが、世界的には自身のものと異なる言語が必ずしも外「国」語ではないケースが多い。日本に住んでいると実感しづらいが、１つの国で複数の言語が話されている（公用語になっていることも多い）というのはまったく珍しいことではないからである。その１つがスペインであるが、スペイン憲法では、そのような多様な言語様式は「豊かさ（riqueza）」であると規定されている。「言葉の壁」という言葉があるが、言語が異なることは壁になるとは限らず、むしろ豊かさと文化的な豊かさともなりうるということである。

グループワークでのコメント

ワークショップ当日は上記のような概要のプレゼンテーションの後、その内容に基づいた

グループワークを実施し、各グループで話した内容を共有してもらったが、発表者がメモをとることをほぼ失念していたため、あまり詳細な内容は記載できない。以下、覚えている範囲（およびわずかなメモ）で箇条書きにする。

・グループ 1
国際情勢によって取る言語が異なって来る（影響がある）。

・グループ 2
翻訳アプリに頼りすぎてはいけない。自身の言葉で語らなければならない場面というのはある。
翻訳できないことばがある。たとえば「店」は tienda ではない。

・グループ 3
日本にいるネイティブの人とのつながりを意識したような語学教育・学習ができればいいなと思う。

・グループ 4
「なんで外国語を学ぶの？」は、むしろこちらから問うことの方が多い。今日のプレゼンの内容は総論だが、個別の学生によって事情が異なる。

＜参考文献＞
大木充・西山教行(編)(2011)『マルチ言語宣言　なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』，京都大学出版会.
木村護郎クリストフ(2021)『異言語間コミュニケーションの方略 —媒介言語をめぐる議論と実際』，大修館書店.
木村護郎クリストフ(2022)「異言語間コミュニケーションの一方略としての機械翻訳」，ことばと社会編集委員会(編)『ことばと社会 24 号　転換期の大学言語教育』, pp. 18-36, 三元社.
鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』，岩波書店.
鈴木孝夫(1990)『日本語と外国語』，岩波書店.
泉水浩隆(編)(2018)『ことばを教える・ことばを学ぶ　複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)と言語教育』，行路社.
西山教行・平畑奈美(編)(2014)『「グローバル人材再考」　言語と教育から日本の国際化を考える』，くろしお出版.
森住衛ほか(編)(2016)『外国語教育は英語だけでいいのか　グローバル社会は多言語だ！』，くろしお出版.

Lago Mediante, Pilar, 落合佐枝, 大森洋子 (2012)「『スペイン語教育改善のためのアンケート調査』」結果報告, 『スペイン語学研究』, 27, pp.23-41.

Kawaguchi, M. (2020) "La traducción como herramienta en el aula de ELE -una reflexion de un profesor no nativo (japones) de español-", P. Taboada-de-Zúñiga Romero *et al.* (eds.) *Perfiles, factores y contextos en la enseñanza y el aprendizaje de ELE/EL2*, pp.499-512, ASELE.